2009. 3. 1

（Japanese Academy of Learning Disabilities）

日本LD学会会報 第68号

事務局：〒320-0043 宇都宮市桜3-1-6 吉田ビル2F　TEL028-666-0533 FAX.651-6520
URL. http: ／／ www.soc.nii.ac.jp ／ jald ／

大学入試センター試験を通して感じたこと

和歌山大学大学院教育学研究科
小　野　次　郎

2007年、特別支援教育の本格実施に伴い、LD、ADHD、高機能広汎性発達障害（HFPDD）に更なる注目が集まっています。

小児科医である私は、ADHDやHFPDDに対しては何らかの貢献ができると思っていましたが、LDに関しては、教育現場の先生方にお任せする以外には方法はありませんでした。ただし、子どもたちの成長・発達を考慮するとき、定型発達を示す子どもでも、発達障害の子どもでも、学習力の向上を抜きにして、十分な支援が出来ているとはいえないことも痛感しています。

原稿執筆時、ちょうど大学入試センター試験が行われ、私も試験監督として働きました。担当教室には、受験生が40人いました。まさしく、小・中学校の通常学級に匹敵する規模ではありませんか。教員対象の講演会では、必ずといってよいほど「通常学級には、2－3人の、知的障害を伴わない発達障害の子どもたちが在籍します」と強調しています。ということは、目の前にいる40人の受験生の中にも2－3人いるということになります。

ところが、誰一人として、「漢字にルビが振ってあったり」、「拡大した答案用紙を使用していたり」の光景はありませんでした。このクラスは特別な配慮を必要としない生徒が集まったクラスなのか、と一瞬思いました。しかしながら、思い返せば、和歌山での10年間の試験監督生活の中で、そのような支援の光景を目にすることはありませんでした（もちろん、肢体不自由や視覚障害の学生に対する支援はありました）。おそらく「気づかれていないのだろう」あるいは「支援を申請したが受け入れられなかったのか」などと思いを馳せておりました。結局、まだまだ十分な配慮が行き渡っていない現状を、目のあたりにしているだけなのだろうと思いました。

特別支援教育が本格実施されて2年が経過しようとしています。子どもたちに少しでも適切な支援が提供されるように、微力ではありますが、日本LD学会を通して、会員の皆さんと一緒にお手伝いが出来ればと願う次第です。